



7/26 福島のかーちゃんをつながる

飯館村から避難。避難先で仲間と地域で
「**かーちゃんのカ・プロジェクト**」 立ち上げ

渡邊とみ子さん

を生協にお招きして

「福島のいま」& 郷土料理交流会



みそじゃが
召しあがれ！

辛かった時、現場から学んだ事



あきらめないことにしたの

沢山悔しい思いをしたよね

沢山、沢山泣いたよ

でも、生きてる

やっぱり止まっては駄目だよ

どんなに小さな一歩でも前へ進んだら

ほらね。実ってくれたんだもの

植物は、こんな状況の中でも

頑張って生きているんだもの

だから私は

あきらめないことにしたの

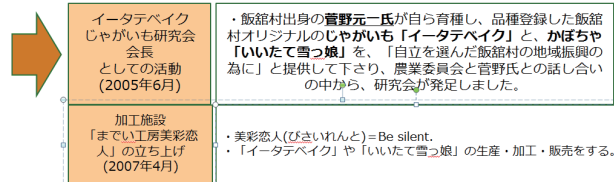


わたしの原点は 飯館村での暮らし、地域づくりの夢

「女性も地域のリーダーとなり、自分達の地域の事は自分達で考えて行く」地域づくりの活動が原点です。

・地域づくりに参加し、「飯館村で暮らす」という事を真剣に考えられるようになりました。

「地域づくりで夢・目標を持ち、それを具現化するという思考回路」で頑張ってきました。



原発事故ですべてを奪われてしまった～

「イータデバイク」がようやく世の中に出せる、そう思った矢先の原発事故でした。

イータデバイク、種芋生産
が国から認可される
(2010年)

イータデバイクの種芋生産は国家管理で、種芋生産がようやく国から認められて始まったのは平成22年でした。私も馬鈴しょ植物防疫補助員として何とでも世の中に出す為に頑張りました。その結果、飯館村で原種栽培が合格になり、23年度産で採種が合格すれば念願の世の中に出せる段階になっていました。



原発事故前の工房入口



避難後4ヶ月の姿



2012年12月の風景この姿を見るたび涙が溢れてならない

一人一人訪ねあわいて「結もちプロジェクト」・・・かーちゃんたちに笑顔が戻ってきた！

飯館村で繋がりのあったかーちゃん達を一人一人訪ね歩くことから始まりました。

かーちゃん達を一人一人訪ね歩く
(福島大学地域再生研究所 研究員として)
(2011年10月)

かねてから飯館村の地域づくりに関わっていた福島大学の先生から「とみ子さん、今どうしているの？」という電話があり、直接お会いして「かーちゃんのカプロジェクト」の構想を聞き取りました。

・飯館村と同じように原発事故の避難者であり、僕も加工場も奪われてしまっていて生きがいを感じてしまったかーちゃん達が、食に關する技術や味を伝え、地域を元気づけることとを目標にした活動の始まりでした。

・避難後の生活、今後どうしたいかなどを訪問しましたが、その当時のかーちゃん達からは、「先の見えぬ中でこの先どうしたいかは考えられない」「自分達が作った物が使えなく、捨てて作られた物を食べて使ってまでではできない、意味がない」とマイナスの言葉が目立ちました。

・しかし、彼等が支障だけの生活ではなく、自分達で動き出したい！誰かが引っ張って行ってくれるの動き出せる気がする、という声も聞かれました。

「結もちプロジェクト」の開催へ。

安全の自主基準
を決める
首をしめるのを覚悟して
20ベクレル/kg以下

「結もちプロジェクト」をきっかけに、かーちゃん達に笑顔が戻ってきました。

「結」
(2011年12月)

・当時、福島のアミから国の基準の500ベクレルを超えるセシウムが検出されて、福島の水が使えない状態でした。困った私達の為に、福島大学の先生が兼ねてから交流のあった、新潟県石打地区から、もち米と青肌大豆の提供がありました。「中越地震でお世話になったからお返しです」という温かい心遣いが、私達の第一歩になりました。

・人と人を結び、地域と地域を結びという「結」の気持ちから「結もちプロジェクト」としました。このプロジェクトがきっかけで、かーちゃん達に笑顔が戻ってきました。そして、「またやりたい！」という声があがったのです。



かーちゃんのカプロジェクト開始！

福島県地域雇用再生創出・モデル事業として、かーちゃん達12名の雇用が始まりました。(2012年4月)

・健康弁当や、漬物、お菓子等の製造販売ができるようになり、拠点としている「あぶくま茶屋」にはかーちゃん達の賑わいにあふれています。



漬物づくり (2012年1月)



増える新商品 (2012年5月)



放射能検査後の無残な検体



かーちゃん弁当の研究開発 (2012年5月)

かつての飯館村はたいへん美しい村でした。厳しい自然環境ではありましたが、村の人たちは助け合い、手間暇惜みず、丁寧に、心を込めて、相手を思いやるという「までい」な生活文化を送っていました。自治体の広域合併が進むなかでも、村に誇りをもち、存続・自立する道を選びました。

しかし、2011年3月の東電福島第一原子力発電所の事故により、すべてを失いました。全村人が村から避難を余儀なくされました。家族、友人、地域が、住む場所も、心もばらばらにされました。それでも、これまでかーちゃん達が築いてきたものを決して無駄にはしないと、渡邊とみ子さんはあきらめず、皆で前へ歩み続けています。

——イモは思った。この人はなぜ、自分が芽を出したことをこんなに喜んでるのだろ。その時、自分がこの世に生まれてきた理由を知った気がした——。

「イータデバイク」「いいたて雪つ娘」イモ先生が30年かけて育んだジャガイモとカボチャは、福島のかあちゃんと一緒に村を飛び出した。

「村がみんななどたかかして、いい村をつくら」全村避難となり、かあちゃんは避難先で休耕田を借りてイモを育てることにした。

村がバラバラになっても、イモが飯館を語り、人を繋いでいく。

かあちゃんは外ではキラキラ笑顔でみんなを照らす。けれどイモは知っている。その陰で流した涙の一粒一粒を。

その小さな粒が波紋を起こし、県外へ、全国へ、世界へと広がっていくのだろ。

イモは土の中で、その一瞬を生きている。



6：避難解除・帰村とこれから



希望
暗闇の中から僅かの
光を探してきました
辛くて、悔しくて、
沢山泣きました
幾多の困難や試練の
中でも必ず夜明けは
やってきます

2016年6月26日
我が家の夜明け

飯舘村は2017年3月をもって避難解除になる。誰でも故郷に寄せる思いは強い。種を繋ぐという選択をした私は帰りたくとも帰れない選択を選んだ。それは未来に繋ぐ種であり、どこに暮らそうと飯舘村を発信していく思いに変わりはない。(渡邊さんPPT資料より)

第二部 伝えたい味、広げたい思い、残したい知恵 郷土料理交流会



知って、考えて、向き合おう

後半は郷土料理「味噌じゃが」の調理。事前に取り寄せた食材はゲルマニウム半導体検出器で12時間掛けて放射能を測り、結果は134Csが不検出、137Csが0.06Bq/kgでした。生協が取り扱う他の生産者の作物と変わらない値です。

これからも生協は厳密な放射能検査を行い、それを消費者である組合員皆さんにお伝えしてゆきます。その数値から、それぞれが考え、判断してゆきましょう。

【参加者の声】

女性の底力に感じ入り

渡邊さんは震災以前から、力強く、地道に農業に携わってこられたのですね。それが震災後一気に爆発したかのような奮闘ぶり。「あきらめないことにしたの」の詩に心打たれました。農業を担う日本女性の底力に感じ入りました。

日本の農地は腐植の多い土壌でセシウムが移行しにくいというお話を伺いました。福島のものもすべて検査され、国の基準100ベクレルを大幅に下回っていると思いますが、風評被害が相変わらずで、スーパーなどでは他県のものより安価に売られている感があります。

「味噌じゃが」ととてもおいしく頂きました。新じゃがはくずれることがないので今の時期ピッタリだと思います。じゃがいもを少し頂いて帰り、早速夕食時に作ってみますと、主人が喜んで食べました。(清野)

【かーちゃんのお話から 一放射能検査のこと】

かあちゃんたちにとって、3食のお弁当は大切な生活の一部。それが毎日、毎日、放射能の検体として送られ、ぐちゃぐちゃになって帰ってくる。



あの時はみんな泣いた。こんな思いしてまで作りたくない... けれどもあじいのはここから!

袋に詰めたもとお弁当をおせちにリベンジ焼きでみんなで食べる。このたものを土に還す。循環が生まれる。

ある時、幼い子を連れたお母さんが、かあちゃんたちにありがとうと言った。これも必要なことだったんだって。



(板子)

【参加者の声】

心寄せていきます

会場についたのが遅くてごめんなさい。気持ちは少しですが寄せています。

とみ子さんの力づく、自信に満ちたお話しぶりに圧倒されました。ずっとがんばって仲間を率いて仕事をつくり出し、続けてこられたのが感じられました。農業がこれからも続いていけるように見守っていきます。

漁業の方も心配しています。はらがまのねばうま松前付けやさばの漬け魚はおいしいので冷凍庫にいつも入っています。 (西尾)



皆に響かせたい

「あきらめなことにしたの」涙が出ます。あぶくま食の遺産プロジェクトの「伝えたい味、広げたい思い、残したい知恵」。

この言葉、今を生きる人の皆に響かせたい。すべてが危機的な状況の現在、生きることは食べること、生き方を真剣に考えたい。

すごいパワーです、どん底に落とされた当事者にしか分からない思い。想像もできない悲しみ、苦しみ、怒り。ゆえの笑顔もあったと思います、応援します！

福島だから、福島産だからと恐れることなく、きちんと測って、安全なものを頂く、頂けること、知ること、知らせることに真剣な方たちがいること。ありがたいと思います。

生協まつりに出店してもらったり、安全とわかっているものをどんどん宣伝し、みんなに買ってもらう。ツアーも。顔を合わせて話す機会を持ちましょう。 (戸井田)

前日 7/25 は常総市で被災地どうしの交流会を開催しました

常総市水害支援でつながった地域のみんなで企画・運営できました！

常総市橋本町町内会・森下町町内会・NPO コモンズ・常総生協・茨城県生協連合会・ワーカーズコープちば・フードバンクちば・ワーカーズコープセンター事業団関東事業本部・いばらきコープ、常総市、常総市社会福祉協議会、福島県。どの団体もそれぞれ主催や協力、後援の形でこの会を実際に作り上げてくださいました。



お笑いグループ「ふくしまボンガーズ」



橋本町町内会長、古矢さん



森下町町内会長、西堀さん

昨年の大規模災害で深刻な被害を受けた常総市水海道の橋本町、森下町のみなさんと、支援でつながった市民団体が集結して渡邊とみ子さんのお話会とお茶っこ（居場所カフェ）を開催しました。福島県庁からも駆け付けてくれました。

当日は地域の方々を中心に予想を上回る 120 名もの方が来場され、急きょ席を増設するほどでした。

「原点は飯館村の暮らし、あきらめない、つづける」と、被災し避難していたカーちゃんたちとあぶくまの食文化の継承と生きがいづくり、福幸をめざして前を向く渡邊さんのお話をみんなで聞くことができました。参加者からも被災地を忘れない、地域を耕し自給圏をつくり、災害がおきても支え合える地域を作っておこうよとの声があがりました。

